

〈全国大会報告〉

第四十七回全国高等学校総合文化祭（鹿児島大会）報告

須恵高校 田中 幸二郎

令和五年八月二日から三日にかけて、鹿児島県薩摩川内市で二〇二三鹿児島総文の書道部門が開催され、本県から十三名の生徒が参加した。

全国大会では作品規格の規定が改訂され、これまで最大三尺×八尺サイズまで認められていたのが今回より最大で二尺×八尺サイズまでとなった。それに伴い、作品制作の幅に制限がかかった形となったが、その分、作品の方向性は定めやすくなったとも言える。

福岡県では県展サイズや全紙サイズが一般的であるため、生徒にとって二尺×八尺サイズは九州大会や全国大会のような機会でなければ書くことはあまりない。しかし、県によっては二尺×八尺サイズで書かせるのが一般的である都道府県もあるため、そうした県に比べれば、一歩出遅れた状態からのスタートとなる。そのため、春休みを利用して何度も手本を練り直し、出場する生徒と共に細かく試行錯誤を重ねながら作品制作を進め、やっとの思いで作品を完成させることができた。

そして迎えた全国大会初日。展示会場に足を踏み入れるといつも息を呑むような空気に包まれた感覚を覚える。大胆で奔放な作風の北海道の作品をはじめ、各県の特徴が表れた作品が会場を彩る。一文字のみの爨宝子碑の臨書作品があるかと思えば、数百文字に渡る細字作品もあり、福岡では見られない書風の創作作品など、多種多様な作品に大いに刺激を受けた。

二日目、バスで会場であるサンアリーナ川内に移動する。開会式を終

え、生徒達は鹿児島の屋久杉を使用した栞とコースターの制作を通じた交流会に参加した。本校の生徒も最初は初対面の子との交流に、臆している様子ではあったが、さすがは高校生。会が始まり、しばらくしてから様子を見ると難なく他県の代表生徒と打ち解けており、楽しいひと時となったようであった。しかも、話を聞けば、全国大会後にも個人的に遊びに行くほど仲良くなったとのことだった。書を通じて人が繋がる、そんな書という文化の魅力を改めて実感できた交流会となった。

三日目、SSプラザさんだいにて講習会が行われた。講習を行うのは高等学校文化連盟全国書道専門部理事長 栗山仁司先生。各県代表の作品を「線質」「字形」「構成」「意図に基づいた表現」の観点から解説され、福岡県からは福岡西陵高校の徳重さん、八幡中央高校の浜崎さんの作品が取り上げられた。講習会後には審査結果が発表され、山門高校の山下さんが特別賞・普公賞、城南高校の荒田さん、須恵高校の山口さんが特別賞を受賞し、盛況のうちに大会は終了した。

全国大会の中での様々な経験は、生徒の大きな財産になったに違いない。大会で出会った生徒達が次の文化の担い手になってくれることを切に願うばかりである。

末筆に大会の全ての関係者の方々に御礼を申し上げ、報告とさせていただきます。たく。

